

# としょかんだより 第95号

2015年10月開館予定表

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2015年11月開館予定表

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

	9:00-20:00		9:00-17:00
	13:00-20:00		13:00-17:00
	休館日		9:00-19:00

※10/14-16はシステムメンテナンスのため  
閲覧のみ可です。(OPAC使用停止)

## 発行所

〒648-0280

和歌山県伊都郡高野町

高野山 385

高野山大学

図書館閲覧室

TEL

0736-56-3835

FAX

0736-56-5590

E-mail

service-lib@koyasan-u.ac.jp

## 第3回戸田文化講座「(体験)高野紙紙漉き」



10月6日(火)高野町中央公民館にて第3回  
戸田文化講座を開催しました。

講師は高野町教育委員会  
飯野尚子さん。

高野紙を漉くだけでなく、  
紙漉きができるまでの過程

を実際に体験できた貴重な時間となりました。



次回の戸田文化講座は

「高野七口について-国史跡追加指定高野参詣道-」

講師：入谷和也氏（元和歌山県教育委員会教育企画員）

日時：10/29（木）16：40～18：00

場所：高野山大学2階205号教室

講師：入谷 和也氏（元和歌山県教育委員会教育企画員）

演題：高野七口について-国史跡追加指定高野参詣道-

事前予約不要ですのでどうぞ自由にご参加ください

## グループ学習室開設

図書館2階の13号室は、グループ学習室と  
してご利用できるようになりました。

予約制となっておりますので希望者の方は  
閲覧室カウンターでお申込みください。



## 第2回 図書館茶話会 開催のお知らせ

日時：11月24日(火)17時



主催：本学裏千家茶道部

場所：高野山大学図書館2階閲覧室

参加は自由となっておりますので皆様、お誘いあわせのうえ、  
どうぞお越し下さい。

# — 説話の森(5) 検非違使忠明の危機 —

高野山大学教授 図書館長 下西 忠

講義で学生と忠明の説話を鑑賞したが、それを今回は書く。説話の解釈という問題について考えてみたいからである。中世の説話集『宇治拾遺物語』にみえる検非違使忠明の話である。検非違使とは主として都の治安維持、訴訟裁判もおこなった強大な権力をもった令外官りょうげのかんであった。検非違使となった忠明が若い時に経験した危機はこうであった。

これもいまは昔、忠明といふ検非違使ありけり。それが若かりける時、清水の橋のもとにて、京童部どもと、いさかひをしけり。京童部、手ごとに刀をぬきて、忠明をたちこめて、ころさんとしければ、忠明もたちをぬいて御堂さまにのぼるに、御堂の東のつまにも、あまた立ちて、むかひあひたれば、内へ逃げて、薮のもとを脇にはさみて、前の谷へおどりおつ。薮、風にしぶかれて、谷の底に、鳥のあるやうに、やをら落ちにければ、それより逃げていにけり。

京童部ども、谷を見おろして、あさましがり、たち並みて見けれども、すべきやうもなくて、やみにけりとなん。(巻七「検非違使忠明の事」)

都の清水寺で京童部(若い乱暴者)と何かのことで口論になり、追い詰められた忠明が清水寺の舞台から飛び降りて危機を脱し逃げ去ることができたという話である。薮戸を両脇にはさんで鳥のように舞台の下に舞い降りたことはおもしろい。説話はもともと誇張がないとある意味でおもしろくないが、それにしても危機の脱出法がユニークであった。後半の段落にあるように、谷を見下ろして呆然と立ちつくしている京童部たちの表情が目には浮かぶ。都の若い乱暴者たちは、忠明の思いもつかない脱出方法に驚きあきれた。

作者の目は、忠明その人に向けられた。つまり「忠明の智慧と決断力と胆力に富む人間像」(永積安明「宇治拾遺物語の世界」)に作者の目は釘付けになったといえる。自らの運命を強い意志で切り開いた忠明に驚いたということになる。

じつは、この説話は院政期成立の『今昔物語集』に同文的に書かれているが、話末の評言が、「忠明、京童部の刀を抜きて立ち向かひける時、御堂の方へ向かひて、観音助け給へと申しければ、ひとへにこれその故なりとなむ思ひける」と書かれている。

この作者の目は忠明ではなく、観音菩薩に向けられた。靈験あらたかな観音菩薩のおかげで忠明が助かったというのである。人は困ったとき、神仏にすがるという傾向があるのではないか。今昔はそれを書いた。

忠明の危機とその脱出方法について、われわれは二つの享受・解釈をみた。宇治拾遺の作者は、個性的な人間忠明に、今昔の作者は観音菩薩の靈験に目を向けた。ここに仏教説話と世俗説話という方向性の違った説話が誕生することになった。一つの説話から二人の作者の解釈があったが、それは第一次的解釈ということができよう。今昔からは新たな読者の解釈は生まれにくいけれど、宇治拾遺からは永積氏の解釈もそうだが、読者によっていろいろな解釈が生まれる可能性がある。だとすれば、それは第二次的解釈ということができよう。説話の解釈、説話のもつ本質、説話の魅力の一端を垣間見たように思う。



京都高山寺観音像